

## 日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(5)

北 條 礼 子\*

(平成10年4月30日受理)

### 要 旨

日本人 EFL 学習者が外国語(英語)を学習するときに用いている学習方略を調査するための調査項目として、著者は先行研究において最終的に17項目を選定した。

1996年7月に高校3年生 328名を対象に、学習方略と学習方略に関連する諸要因(英語学習の知覚的学習スタイル好性、性格特性(外向性、冒険心、自尊心、権威主義)、動機づけについての計41項目から成るアンケート調査を実施した。その結果、学習方略3要因、知覚的学習スタイル好性3要因、性格特性4要因、動機づけ4要因が抽出された。

### KEY WORDS

学習方略	learning strategy	動機づけ	motivation
性格特性	personality	英語科教育	English education
知覚的学習スタイル好性	perceptual learning style preference		
語学教育	language education		

### 1. 研究の背景

第2言語習得の分野では、コミュニケーション方略、読解方略、リスニング方略などの Ellis (1996) が技能学習方略と呼ぶ、いわば分野別方略が研究の対象となることが増えてきたが、学習方略を対象とした研究も行われている。ここで国内における学習方略に関する研究をみると、Oxford (1990) が開発した SILL (Strategy Inventory for Language Learning: Ver.7.0) に代表されるように、欧米で開発された調査項目を翻訳して使用していることが多く、必ずしも日本人 EFL 学習者に適しているとはいえない状況であった (Watanabe, 1991)。そのため、著者は日本人 EFL 学生 (高校生、大学生) が英語学習において用いている学習方略を対象とした調査項目の包括的な吟味を行い、最終的に17項目<sup>(註1)</sup>を選定した (北條, 1996, 1997a)。

また、学習方略は、他の要因と複雑に関連し合っているといわれている。そのうち、知覚的学習スタイル好性、動機づけ、性格特性について、日本人 EFL 学習者の学習方略とのかかわりを調査するため、著者は以上の3種類の要因を測定する調査項目を検討した (1997b)。その結果、性格特性については、先行研究の結果を参考とし4因子10項目を採用したが、知覚的学習スタイル好性と動機づけについては、知覚的学習スタイル好性が3因子6項目、動機づけが4

---

\* 言語系教育講座

因子 8 項目が抽出された (北條, 1997b)。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は日本人 EFL 学習者の学習方略と学習方略に関連する諸要因の特徴を明らかにすることである。なお、ここでいう学習方略に関連する諸要因は、知覚的学習スタイル好性、動機づけ、性格特性である。

## 3. 研究の方法

- 3.1 対象者：茨城県立高校 3 年生 151 名、新潟県立高校 3 年生 177 名、計 328 名 (男子 171 名、女子 157 名)
- 3.2 測定具：初めに対象者の性別、海外経験、現在の英語学習状況などを問い、その後、5 段階尺度形式の 41 項目が続く形式のアンケート。この 41 項目のうち、以下の①、③、④の 31 項目は、著者の先行研究 (1997a, 1997b) の結果を基に選択したものである。②は Ohmura (1996) が開発した 10 項目を、Ohmura の許可を得た上で用いた。
- アンケートの構成は、以下のとおりである。
- ①知覚的学習スタイル好性に関する 6 項目
  - ②性格特性 (冒険心、自尊心、権威、外向性) に関する 10 項目
  - ③動機づけに関する 8 項目
  - ④学習方略に関する 17 項目
- 3.3 調査実施時期：1996 年 7 月
- 3.4 手続き：アンケートは記名式で、実施時間は約 20 分であった。回答形式は上記の①、②、③については「1. まったくそう思わない、2. どちらかというとそう思わない、3. どちらでもない、4. どちらかというとそう思う、5. まったくそう思う」の 5 段階であり、④については「1. まったくそうしない、2. めったにそうしない、3. どちらでもない、4. ときどきそうする、5. いつもそうする」の 5 段階である。アンケート回収後、1～5 点までの得点化を行って項目ごとに集計した。
- 3.5 分析方法：因子分析

## 4. 研究の結果

### 4.1 学習方略

#### 4.1.1 平均値・標準偏差

英語学習における学習方略に関する 17 項目に対する回答について、「いつもそうする」を 5 点、「まったくそうしない」を 1 点とし、中間段階を 1 点きざみで得点化した。表 1 は 17 項目の対象者全員の平均と標準偏差を示したものである。項目 16 がフロア効果を示したので、因子分析に持ち込まなかった。

#### 4.1.2 因子分析

表 1：学習方略に関する17項目の評定得点の平均と標準偏差 (N=328)

項目	Mean	SD	項目	Mean	SD
1	3.34	1.13	11	3.47	1.01
2	3.18	1.15	12	3.74	0.90
3	3.44	1.12	13	3.27	1.15
4	2.86	1.01	14	3.85	0.93
5	3.12	1.11	15	3.14	1.05
6	3.14	1.25	16	1.85	0.92▼
7	2.47	1.14	17	2.03	1.03
8	3.38	1.02			
9	3.28	1.00			
10	3.57	1.10			

▼フロア効果と判断された質問項目

学習方略に関する17項目の得点について、共通性の初期値を SMC とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その後、再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に3因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンはを表2に示すとおりである。

因子の解釈にあたり、基本方針として、表2の回転後の因子パターンにおいて絶対値 .40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。ただし、調査項目17項目のうち、項目9が .40以上を示さなかったのでこの項目を除いて解釈することにした。

第Ⅰ因子に対して、項目3の「英語を聞いたり読んだりするときには単語一語一語を日本語に訳さないように心がけている」、項目1の「英語を母国語とする人と同じように話そうとまねる努力をする」、項目2の「英語の発音が正しくできるように練習する」、項目4の「誰かと英語で話しているとき、適切な表現が思いつかなければ、ジェスチャーを使う」、項目6の「誰かと英語で話しているとき、適切な表現が思いつかなければ、似たような意味の別の言い方で代用する」、項目7の「自分の英語の間違いに注意し、もし気づいたらその後の学習に生かす」、項目5の「誰かと英語で話しているとき、適切な表現が思いつかなければ、似たような意味の別の言い方で代用する」の7項目がプラスの負荷を示した。この7項目から、生徒が正しく英語を発音したり話したりできるように練習や努力をし、誰かと英語で話すときに、話しの大筋を捉えようと努力している姿や、誰かと英語で話しているとき、たとえ適切な単語や表現が浮ばなくとも、別の単語や表現を考えたりジェスチャーを用いたり、というように、何とかコミュニケーションをしようとする態度や、さらに、英語の間違いに注意し、間違ったときにはその後の学習に生かすという態度がうかがえる。この7項目に共通しているのは、練習したり、努力したり、工夫したりすることにより、何とかコミュニケーションをしようとする積極的な態度であると推察される。そこで、第Ⅰ因子は「コミュニケーション志向」と命名した。

次に、第Ⅱ因子に対して、項目11の「英語で書かれた本を読む機会をなるべく多くつくり、英語の勉強に役立てようとする」、項目10の「英語で話しかけられる人をさがし、英語を話す機

表 2 : バリマクス回転後の因子パターン

	因子 I	因子 II	因子 III	共通性
項目 3	0.7658	0.1534	0.2022	0.6510
項目 1	0.7647	0.2267	0.0738	0.6416
項目 2	0.7469	0.2659	0.1722	0.6582
項目 4	0.7183	0.2047	0.1403	0.5777
項目 6	0.6861	0.1765	0.2636	0.5714
項目 7	0.6334	0.2090	0.2031	0.4861
項目 5	0.5845	0.1445	0.1674	0.3905
項目 11	0.1527	0.5586	0.0539	0.3383
項目 10	0.0088	0.5328	0.0775	0.2900
項目 13	0.3332	0.4788	0.2522	0.4039
項目 8	0.2872	0.4759	0.1980	0.3482
項目 17	0.2150	0.4237	0.1775	0.2573
項目 9	0.1845	0.3981	0.1252	0.2082
項目 14	0.1444	0.1497	0.6618	0.4813
項目 15	0.2154	0.1293	0.6238	0.4523
項目 12	0.1899	0.2533	0.5132	0.3635
説明分散	3.8593	1.7762	1.4839	7.1194

(注) 枠囲いされた数値は0.40以上。

会をつくる」, 項目13の「基本的な英文は, 何度も紙に書いておぼえる」, 項目8の「英語の勉強が効果的にできるような勉強法をみつけようと心がけている」, 項目17の「自分がしている行動や自分が見たものについて英語で説明できるかどうか試してみる」の5項目がプラスの負荷を示した。この5項目の内容をみると, 英語で書かれた本を読んだり, 英語を話す人をさがして英語を話す機会をつくったり, 自分の行動を英語で説明してみるなど, 英語に触れる努力をすることと, 英語の効果的な勉強法を心がけることであった。つまり, 積極的に英語に接する機会を作る努力をする積極的態度と英文を中心とした計画的な学習であると判断された。そこで, 第II因子は「英文中心計画的英語接触努力」と命名した。

さらに, 第III因子に対して, 項目14の「授業で聞き逃した単語や文法について, 授業以外の時間に勉強したり, 練習する」, 項目15の「入試によく出る単語, 熟語を暗記する」, 項目12の「単語は単語テストを利用しておぼえる」の3項目がプラスの負荷を示した。これらの3項目に共通するのは, 授業で聞き逃したり入試によく出る単語, 熟語に加えて文法を授業以外に時間をとったり単語テストを利用しておぼえるという, 特に単語を中心とした暗記するという学習態度であると考えられるので, 「単語中心暗記学習」と命名した。

以上をまとめると, 本調査で抽出された英語学習における学習方略は, 以下の3因子ということになる。

因子I: コミュニケーション志向

因子II: 英文中心計画的英語接触努力

因子III: 単語中心暗記学習

## 4.2 学習方略に関連する要因に関する項目

### 4.2.1 平均値・標準偏差

学習方略に関連する情意要因に関する項目、つまり英語学習の知覚的学習スタイル好性の型、性格特性(外向性、冒険心、自尊心、権威主義)、動機づけに関する24項目に対する回答について、「まったくそう思う」を5点、「まったくそう思わない」あるいはを1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表3～表5は各カテゴリの各項目の対象者全員の平均と標準偏差を示したも平均と標準偏差を示したものである。

### 4.2.2 因子分析の結果

以上の24項目は、いずれも天井効果、フロア効果がなかったものと判断し、それぞれのカテゴリで因子を抽出するためそれぞれ因子分析を行うことにした。

#### 1) 英語学習における知覚的学習スタイル好性の型について

英語学習の好みの型に関する6項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。このとき3因子による累積説明率は67.76%であった。その後、再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に3因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンはを表6に示すとおりである。

因子の解釈にあたり、基本方針として、表6の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。ただし、調査項目6項目のうち、すべての項目が.40以上を示した。

まず、第I因子に対して項目2の「LLで外人の自然な英語を聞きながら勉強するのが好きだ」、項目1の「テレビ番組やビデオの教材を用いて勉強することが好きだ」、項目3の「グループになって対話練習やゲームをして勉強することが好きだ」の3項目がプラスの負荷を示していた。3項目とも視聴覚教材を利用しながら学習したり、グループでのゲームなど視聴覚教材を併用して学習することへの好みとグループでの対話練習やゲームへの好みを表していると考えられた。この3因子に共通するのは何かを用いながら、あるいは何かをしながら英語を勉強するのが好きだという傾向なので、因子Iを「視聴覚・ゲーム型」と命名した。

次に、第II因子に対して項目4の「何かをするとき、その指示を誰かに読んでもらうより、自分で読むほうがいい」と項目6の「何かをするとき、その指示を読んだり聞いたりするより、まずしてみるほうが好きだ」がプラスの負荷を示した。両項目とも、実際に自分で体験してみ

表3：英語学習の知覚的学習スタイル好性の型に関する  
6項目の評定得点の平均と標準偏差 (N=328)

項目	Mean	SD
1	2.94	1.13
2	3.11	1.10
3	3.03	1.13
4	3.12	1.02
5	3.18	0.95
6	3.16	0.97

表 4：性格特性の評定得点の平均と標準偏差 (N=328)

項目	Mean	SD
1	2.72	1.07
2	3.29	1.20
3	2.53	0.86
4	3.91	1.06
5	2.67	1.11
6	4.07	0.90
7	3.08	0.96
8	3.32	0.96
9	3.29	1.15
10	2.80	1.15

表 5：動機づけの評定得点の平均と標準偏差 (N=328)

項目	Mean	SD
1	3.62	1.12
2	3.67	1.03
3	3.47	1.09
4	3.50	1.09
5	3.98	1.01
6	3.32	1.06
7	2.22	1.10
8	2.58	1.13

表 6：バリマクス回転後の因子パターン

	因子 I	因子 II	因子 III	共通性
項目 2	0.7827	0.2493	0.0871	0.6225
項目 1	0.7533	-0.0169	0.2338	0.6823
項目 3	0.7242	0.1369	-0.2597	0.6107
項目 6	0.0234	0.8350	0.2179	0.5659
項目 4	0.2601	0.6631	-0.2420	0.8391
項目 5	0.0720	0.0303	0.9127	0.7452
説明分散	1.7779	1.2190	1.0687	4.0656

(注) 枠囲いされた数値および下線を引いた数値は0.40以上。

ることを好むタイプと考えられるので、因子 II は「体験型」と命名した。

最後に第 III 因子に対して、項目 5 の「教科書を読むより、先生の説明やテープを聞くほうがいい」がプラスの負荷を示したが、読むより、耳から刺激を受けることを好む傾向なので、「聴覚型」と命名した。

以上をまとめると、本調査で抽出された英語学習の好みの型は、以下の 3 因子ということになる。

因子Ⅰ：視聴覚・ゲーム型

因子Ⅱ：体験型

因子Ⅲ：聴覚型

## 2) 性格特性（冒険心、外向性、自尊心、権威主義）について

性格特性（冒険心、外向性、自尊心、権威主義）に関する10項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復種因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。このとき4因子による累積説明率は61.06%であった。その後、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンはを表7に示すとおりである。

因子の解釈にあたり、基本方針として、表7の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。ただし、調査項目10項目のうち、すべての項目が絶対値.40以上を示したの、項目5と項目8が2因子に対して負荷を示したので、この2項目を除いて、解釈することにした。

まず第Ⅰ因子に対して、項目7の「私は難しいと思うことほど、やってみたくなる」と、項目1の「私は解けないような問題ほど解いてみたくなる」の2項目がプラスの負荷を示した。両項目とも、元来冒険心を測定する項目として採択された項目であるが、項目内容が「冒険心」であることを確認し、その上で改めて「冒険心」と命名した。

次に、第Ⅱ因子に対して、項目10の「年長者や目上の人は苦手だ」がプラスの負荷を示し、項目2の「知らない人に道などを遠慮なくたずねることができる」がマイナスの負荷を示した。また、項目5の「パーティでは、冗談を言ったり、話したりするのは他の人にまかせて、自分は黙っているほうだ」と項目8の「人前ではきまりが悪くて思うように自分を出せない」がこの第Ⅱ因子に対して両義性を示した。このうち、項目2と5と8はもともと外向性を測定する

表7：バリマクス回転後の因子パターン

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
項目7	0.8577	-0.0504	0.1235	0.0633	0.7575
項目1	0.8236	-0.0258	0.1266	0.0266	0.6955
項目10	0.0253	0.6695	0.1122	-0.0367	0.4628
項目5▽	0.0705	0.6385	-0.4112	-0.0584	0.5851
項目2	0.2415	-0.7340	0.0667	-0.0031	0.6015
項目9	0.1473	0.0928	0.7214	0.0502	0.5532
項目3	0.2335	-0.1147	0.7044	0.1282	0.5802
項目8▽	0.2536	0.4596	-0.5511	0.1779	0.6109
項目4	-0.1125	0.1343	0.1284	0.8434	0.7584
項目6	0.2963	-0.2461	-0.0257	0.5932	0.5009

説明分散 1.7190 1.7094 1.5547 1.1230 6.1061

(注) 枠囲いされた数値はおよび下線を引いた数値は | 0.40 | 以上。

▽ 両義性を示した項目

項目として採用されたのに対して、項目10は元来「権威主義」を測定する項目として採用された。しかし、内容をよく考えると、項目10の内容は外向性にも通じるとも考えられた。さらに外向性とはいっても、項目2がマイナスの負荷を示したことから、知らない人に道などを遠慮なくたずねることができるとはいえないという消極的な傾向が強いと判断され、外向性があまり豊かではない特徴を示していると考えられるので、ここでは第Ⅱ因子を「低外向性」と命名した。

さらに、第Ⅲ因子に対して、項目3の「自分には長所がたくさんあると思う」と項目9の「人に勝と思う科目やスポーツがある」の2項目がプラスの負荷を示した。両項目はその内容から自尊心を表現する項目と判断され、第Ⅲ因子を「自尊心」と命名した。

最後に第Ⅳ因子に対して、項目4の「グループ活動はリーダーが重要だと思う」と項目6の「私は自分が得意になれることなら何でも知っておきたい」がプラスの負荷を示した。項目4は権威主義を示す項目であるが、項目6は「自尊心」を示す項目である。ここでは負荷量の大きさから一応「権威主義」と命名することにした。

以上をまとめると、本調査で抽出された英語学習の好みの型は、以下の4因子ということになる。

因子Ⅰ：冒険心

因子Ⅱ：低外向性

因子Ⅲ：自尊心

因子Ⅳ：権威主義

### 3) 動機づけについて

動機づけに関する8項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。このとき4因子の累積説明率は78.47%であった。その後、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈にあたり、表8の回転後の因子パターンにおいて絶対値.70以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンはを表8に示すとおりである。

第Ⅰ因子に対して、項目1の「英語ができれば英語を話す人々と、より簡単に友人になることができる」と項目2の「より多くの様々な人と出会い、話しができるようになる」がプラスの負荷を示した。この2項目はもともと統合的動機づけを測定する項目として採択された項目であり、改めて「統合的動機づけ」と命名した。次に第Ⅱ因子に対して、項目8の「英語で成績が良いと、教師や友人からの評価が高まる」と項目7の「英語で良い成績を取ると、親がほめてくれる」の2項目がプラスの負荷を示した。両項目とも、プライドが満たされたり、親にほめられたりすることなどの、プライドにかかわる項目であることから、「プライドの充足」と命名した。さらに、第Ⅲ因子に対して、項目4の「社会的に認められるには、少なくとも1つの外国語を使えることが必要である」と項目3の「将来、良い職業に就くために必要である」の2項目がプラスの負荷を示した。両項目とも、もともと道具的動機づけを測定するための項目であり、ここで改めて「道具的動機づけ」と命名した。最後に第Ⅳ因子に対して項目5の「学校で英語の授業があることや、進学するための入試科目なので必要である」と項目6の「英語の試験でいい点数をとって、よい成績をとる」の2項目がプラスの負荷を示した。この2項目は英語でよい成績を取るため、という動機を表していると考えられるので、「成績向上意識」と



表 8：バリマクス回転後の因子パターン

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目 1	0.9218	0.0574	0.0001	0.0297	0.8539
項目 2	0.9200	0.0234	0.0800	-0.0309	0.8544
項目 8	0.0728	0.8757	0.0948	0.1077	0.7928
項目 7	0.0164	0.8617	0.1417	0.1005	0.7730
項目 4	-0.0064	0.0767	0.8560	0.1448	0.7597
項目 3	0.0882	0.1641	0.8318	0.1116	0.7391
項目 5	0.0335	-0.0235	0.1213	0.8980	0.8228
項目 6	-0.0472	0.3703	0.1678	0.7174	0.6822
説明分散	1.7129	1.6837	1.5030	1.3781	6.2777

(注) 枠囲いされた数値は0.70以上。

命名した。

以上をまとめると、本調査で抽出された英語学習の動機づけは、以下の4因子ということになる。

因子 I：統合的動機づけ

因子 II：プライドの充足

因子 III：道具的動機づけ

因子 IV：成績向上意識

## 5. 研究の考察

### 5.1 学習方略について

本研究から日本人 EFL 学習者の学習方略に関して得られた知見は、まず、日本人を対象とした先行研究が報告していた結果を支持するものであり、欧米の研究が抽出した学習方略のタイプとは異なるタイプの学習方略を得たことである。Oxford が提案している学習方略の分類に当てはまるというよりむしろ、Oxford の下位分類のいくつかが組み合わされてそれぞれの因子が成り立っていると考えられる。

その中でも第 I 因子として抽出された「コミュニケーション志向」因子は、日本人学習者を対象とした先行研究 (Watanabe, 1991) においても指摘されており、日本人に特徴的な傾向であると考えられる。調査の対象者であった高校生を取り巻く環境について考えると、授業以外で英語に触れる機会が増大していることからこの結果は納得のいくものであると推察される。

第 II 因子の「英文中心計画的英語接触努力」はいわば英文中心であり、第 III 因子の「単語中心暗記学習」は単語中心であると考えられるが、日本人の英語学習において、少なくとも高校生レベルでは、英文と英単語という違いがみられたことが、大変興味深い。

なお、Oxford の学習方略の分類と考え合わせると、この因子には認知方略、メタ認知方略、補償方略に分類された内容が含まれていると考えられる。第 II 因子の「英文中心計画的英語接触努力」は、認知方略、メタ認知方略、社会的方略が、第 III 因子には記憶方略、認知方略、メ

タ認知方略がそれぞれ組み合わせられたものと判断される。

ここで再度、本研究で抽出された因子に含まれなかった内容を、Oxford の分類と照らし合せて考えると、本研究では、本調査をとおして記憶方略と社会的情意的方略が少なかった。記憶方略には、さまざまな記憶術などの工夫をこらした方法があるが、日本人学習者は、どちらかという工夫より丸暗記の段階にとどまっているのかもしれない。また社会的情意的学習方略については、対象者が受動的に英語に触れる機会が増えてきたとはいえ、不安を感じながらも実際に英語を用いて練習するなどの、英語を用いる機会が豊富にあるわけではないことが関係していると思われる。日本人学習者にこの要因が欠けているのではなく、この要因を学習方略として用いる環境がまだ十分に整っていないのであろう。

## 5.2 学習方略をめぐる関連諸要因について

次に、学習方略と他の関連要因であるが、いわば英語学習の好みの型である知覚的学習スタイル好性について「視聴覚・ゲーム型」、「体験型」、「聴覚型」の3因子が抽出された。この3因子を一見しただけでは、視聴覚と聴覚との区分が明らかなではないが、ここでの「聴覚型」は純粹に聴覚的な刺激を好むというより、自分が積極的に接するより、誰かに言ってもらいたいという、他人任せの消極的な好みであると考えられる。学習スタイルは本来「視覚型」、「聴覚型」、「体験型」の3タイプに分類されていたが、第Ⅰ因子としてこの3タイプが合体して抽出された。まず現在の教材をみても明らかなように、視覚型、聴覚型と別々に扱うのが不自然なように感じられることから、この両者が「視聴覚型」と合体したことや、コミュニケーション能力の育成を目指す英語教育が求められていることから、ゲームを取り入れた授業が増えてきたことも考慮に入れると、ここに体験型がさらに組み入れられたことは、新しい発見でありながら、十分に納得のいく結果であらう。

性格特性については、ある程度の分類が得られたと思われるが、厳密には Ellis (1996) が指摘しているとおり、その分類が明確でないことが確認された結果であったといえよう。

動機づけについても、これまでの研究結果と同様に結果が得られた。つまり、動機づけに関して、従来の代表的な分類である統合的動機づけ、道具的動機づけのほかに、プライドの充足、成績向上意識という2因子が加わった形で、計4因子が安定して抽出されたということである。

(註1) 著者による先行研究(1997a)では、学習方略の調査項目として20項目を選定したが、後日、分析の途中で本来であれば17項目とすべきであることが判明したため、本研究では最終的にその17項目を調査項目として扱った。

## 参 考 文 献

- Ellis, G. 1996 *The Study of Second Language Acquisition* (2nd ed.) Oxford University Press.
- 北條礼子. 1996. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(1)」上越教育大学研究紀要 16, 1, 185-196.
- . 1997a. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(2)」上越教育大学研究紀要 16, 2, 583-596.

- \_\_\_\_\_. 1997b. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(3)」上越教育大学研究紀要 17, 1, 269-281.
- \_\_\_\_\_. 1998. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(4)」上越教育大学研究紀要 17, 2, 749-762.
- Ohmura, K. 1996. A Study of the Correlations between Aptitude, Motivation, and Personality with Measured Achievement among Different Grade Levels of Japanese EFL Learners. Unpublished MA thesis presented to Joetsu University of Education.
- Oxford, R.L. 1990. *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Heinle & Heinle Publishers.
- Watanabe, Y. 1991. Classification of Language Learning Strategies. *International Christian University Language Research Bulletin*, 6, 75-102.

## A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (5)

Reiko HOJO\*

In the field of the second language acquisition, there have been several studies on learning strategies found in Japan. The findings of foreign studies report a close relationship with other factors, such as learning style, motivation, personality and so on. Though not much research in Japan has been done on this relationship, the author has tried to prepare or validate appropriate questionnaire items for these factors as well as for learning strategies.

The purpose of this study is to investigate learning strategies, learning styles, particularly, perceptual ones, personality and motivation of Japanese EFL highschool students with the questionnaire items prepared by the author.

Firstly, data on the factors mentioned above were gathered from three hundred twenty-eight highschool students in July of 1996, using a questionnaire consisting of forty-one items total. Then, the data were analyzed by factor analysis, extracting 3 factors for learning strategies, 3 for perceptual learning style preference, 4 for personality, and 4 for motivation.

---

\* Division of Languages: Department of Foreign Languages

付録：本研究で用いた学習方略に関する17項目

本研究で用いた17項目はこれまでの研究で最終的に採択された項目である。

1. 英語を母国語とする人と同じように話そうとまねる努力をする
2. 英語の発音が正しくできるように練習する
3. 英語を聞いたり読んだりするときには、単語一語一語を日本語に訳さないように心がけている
4. 誰かと英語で話しているとき適切な表現が思い浮かばなければ、ジェスチャーを使う
5. 誰かと英語で話しているとき、適切な表現を思いつかなければ、似たような意味の別の言い方で代用する
6. 誰かと英語で話しているとき、単語を思いつかないとき、似たような意味の単語や語句を使う
7. 自分の英語の間違いに注意し、もし気づいたらその後の学習に生かす
8. 英語の勉強が効果的にできるような勉強法を見つけようと心がけている
9. 英語の勉強時間が十分取れるように計画を立てている
10. 英語で話しかけられる人をさがし、英語を話す機会をつくる
11. 英語で書かれた本を読む機会をなるべく多くつくり、英語の勉強に役立てようとする
12. 単語は単語テストを利用しておぼえる
13. 基本的な英文は、何度も紙に書いておぼえる
14. 授業で聞き逃した単語や文法について、授業以外の時間に勉強したり、練習する
15. 入試によく出る単語、熟語を暗記する
16. 入試によく出る基本の英文（基本構文など）を暗記する
17. 自分がしている行動や自分が見たものについて英語で説明できるかどうか試してみる